

出典・参考図書・関連情報
(青文字はリンクしています)

さがみはらの森の変遷

森は遷移を続けて最後はその土地に適した姿(極相林)で安定すると言われています。太古の森の姿は遺跡調査時に花粉化石を調べると周辺の森の様子が分かります。近世以降は森のほとんどに手が加えられて利用され、原生林は丹沢にブナ林がわずかに残っています。近年になり多くの森が放置されて現在の姿になっています。

■ 旧石器時代の森

< 田名向原遺跡 >

旧石器時代(2万年前)の田名向原遺跡の時代は、気温が現在より7~8度低く、今の北海道のような気候で針広混交林の森が広がっていたと考えられています。



針広混交林の例(北海道)



田名向原遺跡の建物想定復元

左写真:[針広混交林(天塩研究林)]より

右写真:[旧石器ハテナ館]より

[田名向原遺跡]

■ 縄文時代の森

< 勝坂遺跡 >

縄文時代中期(5千年前)の勝坂遺跡の時代は、気温が現在より2~3度高く、常緑広葉樹の照葉樹林が広がり、縄文人はクリを栽培して食料や建築材にしていたと考えられています。



照葉樹林の例(屋久島)



勝坂遺跡公園の竪穴住居復元

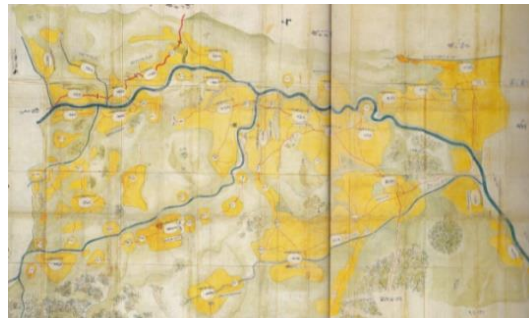
左写真:[屋久杉自然館]より

右写真:[史跡勝坂遺跡公園(相模原市)]より
「勝坂遺跡有鹿谷地点」(相模原市教育委員会)

■ 江戸時代以降の森

< 奥山林の変遷 >

江戸時代は御林(幕府領)や入会山(共同利用地)から松・雑木や薪炭を、相模川を下って厚木に集め(集木アツギ)、平塚から海路で江戸まで運びました。太平洋戦争後の復興需要で拡大造林が行われ、奥山の広葉樹林は伐採され針葉樹が植林されました。しかし安価な輸入木材の拡大で、植林された針葉樹林は放置されるようになりました。



相州津久井領絵図(江戸時代、原本は個人所有)

図:[津久井の古地図](ふるさと津久井第3号:津久井町史編集委員会)より

[津久井町史(通史編)]

[神奈川県林政史](大野図書館所蔵)

< 里山林の変遷 >

江戸時代に百姓林と言われた雑木の里山林は肥料と薪炭の供給源でした。1960年頃の化石燃料と化学肥料の普及で里山林の役割は無くなり放置されました。拡大造林時には里山の一部にも針葉樹が植林されましたが、奥山林と同様に輸入木材の拡大に伴い放置されるようになりました。

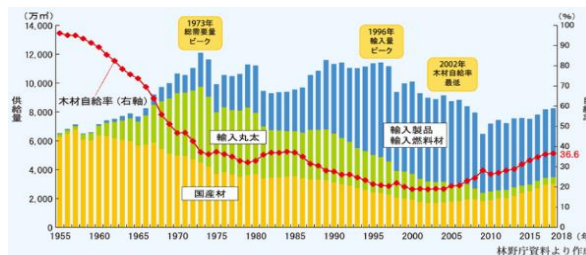


図:[ナイスビジネスレポート]より

< 平地林の変遷 >

相模原台地は江戸時代の大きな新田開発でクヌギ・コナラを植林して炭を作っていました。太平洋戦争後の食糧難時に畑に転換されていき、化石燃料と化学肥料の普及で雑木林は放置されました。1973年に「相模原近郊緑地特別保全地区」として「木もれびの森」が指定され、保全のため手入れがされてきました。



清新付近の雑木林(冬)昭和20年代
出典:[相模原-その開発と変遷-]



大沼の炭焼きについては、郷土資料の記録映画「相模原の炭焼き」で再現されています。映画の中では、実際に炭焼き窯を造り、炭を焼いており、昭和40年頃まで大沼で行われていた炭焼きの様子をうかがい知ることができます。
出典:[相模原の炭焼き]

写真:[木もれびの森ガイド]より

左写真:相模原市立博物館より

右写真:文化財記録映画より

■ 今後の森

< 森の将来像 >

相模原市では平成23年に森林の目指すべき将来像と取り組みの方向性を示す「さがみはら森林ビジョン」を策定し、さまざまな施策に取り組んでいます。

< 森の手入れ >

手入れが行き届かず市民や生物への影響が大きい森は、その自然変化を考慮して森のタイプに合った手入れをしていく必要があります。

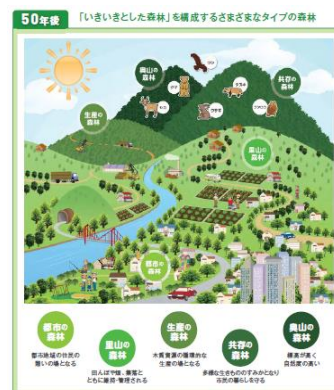


図:[さがみはら森林ビジョン](相模原市、平成23年)より

[さがみはら森林ビジョン実施計画](相模原市、平成25年)